

ZOCALO 2019 2 ▶ 3

ZOCALO=ソカロはメキシコの都市の広場を意味するスペイン語。埼玉県立近代美術館はアートを通して交流する市民の広場をめざしています。

企画展「インポッシブル・アーキテクチャー -もうひとつの建築史-」 建島哲館長 インタビュー

“栄光のアンビルト”をいつか展覧会に・・・長年企画をあたためてきた「インポッシブル・アーキテクチャー」展の実現を直前にひかえた建島館長に、展覧会への熱い想いをインタビュー！

Q. この展覧会を立案したきっかけは？アイデアはどこから来たのでしょうか？

展覧会を思いついたのは、もう10年以上前のことになりました。出発点となったのは、実現しなかった建築の構想に基づく、“もうひとつの建築史”の展覧会ができるのではないかというアイデアでした。展示構成の入口に当たる部分に、ウラジーミル・タトリンの《第三インターナショナル記念塔》を、出口に現代の建築をすえてみてはどうだろうか・・・そして3年ほど前に、ザハ・ハジドの《新国立競技場》のコンペ当選案が諸般の事情により実現できなくなったというニュースを聞き、このプロジェクトこそ展覧会の末尾で紹介すべきだと考えました。このようにタトリンとザハの間を線で結ぶような形で、展覧会の具体的なイメージができていったわけです。



《新国立競技場案》2013年
ザハ・ハジド・アーキテクト+設計JV（日建設計・梓設計・日本設計・オーヴ・アラップ・アンド・パートナーズ・ジャパン設計共同体）
風洞実験模型（高さ75メートルの時点での模型、縮尺1/300）
写真提供：日建設計
写真撮影：小野強志

Q. 「インポッシブル・アーキテクチャー」というタイトルに込められた意味を教えてください。

今回の展覧会の内容に関連する書籍として、磯崎新氏の『UNBUILT』（TOTO出版、2001年）などがあります。これは、“できないこと”を前提とした建築を紹介するもので、今回の展覧会に重なる部分も多くあります。一方で、「インポッシブル・アーキテクチャー」のタイトルでは、ポッシブル（可能性）に対峙するものとして、インポッシブル（不可能性）という言葉を使いました。すなわち、「インポッシブル」の語をタイトルに持ちながらも、一種の可能性への意識をはらんだ展覧会の構想になっているのです。展覧会で取り上げるプロジェクトが実現できなかった理由はさまざまあって、そもそも実現することを前提としない“ファンタジー”として構想された、たとえばブルーノ・タウトの一連のプロジェクトのようなものもあれば、

コンペで落選して実現不可能となったプロジェクトもあります。実は当選案よりも落選案の方が、あたかも印象派の絵画の試みのように、工学的・経済的制約を凌駕した、より過激で面白いプランとなっているケースも多いわけですが。また、磯崎氏のようにあえてコンペの応募条件をクリアしない案、すなわち「批評としてのアンビルト」を確信犯的に目指した構想も存在します。他にもザハのプロジェクトのように、途中で社会的な事情から実現しなくなった例や、アーキグラムやスーパースタジオなど、純粋な机上のグラフィックとしてのアプローチもあり、こうしたさまざまなプロジェクトを包括的に紹介するタイトルを吟味しました。そして、あり得たであろう“もうひとつの建築史”について思いをめぐらせる中で、「ポッシブル」と緊張関係にある対の概念として「インポッシブル・アーキテクチャー」のタイトルがふと思い浮かんだわけです。インポッシブルは、ポッシブルに対する批評的オルタナティブであるといってもよいでしょう。

ご期待ください！

展覧会の出発点としてはこのような構想でしたが、巡回展としてそれぞれ関心領域の異なる各館の学芸員がアイデアを持ち寄り、それが展覧会の幅を広げてより興味深い内容となっていきました。美術寄りのファンタジーとしての自由奔放なプランを紹介するに留まらず、五十嵐太郎氏に監修を依頼し、建築史の専門家の目で作品の検討に加わっていただいたことも大きな力となりました。その結果、専門的な観点からも見ごたえのある展覧会になったのではないかと自負しています。一方で、建築に特化した関心を持たない来場者にとっても、作品の持つ夢想的な魅力を楽しめる展示に仕上がると考えていますので、ぜひご期待ください。（聞き手R.G.）



映像制作・監督：長倉威彦、コンピューター・グラフィックス：アンドレ・ザルジッキ/長倉威彦/ダン・ブリック/マーク・シッチ、《ウラジーミル・タトリン「第三インターナショナル記念塔」(1919-20年)》、コンピューター・グラフィックス、1998年

日本初公開！ポール・シニャック 《アニエールの河岸》のお披露目です。

近代美術館は、今年度の美術作品取得事業において新印象主義の画家ポール・シニャック（1863-1935）の作品《アニエールの河岸》（1885年）を購入しました。取得価格は2億9千万円。こうした高額作品の購入は平成9年のシャガールの作品《オランジュの海岸》（1911年）以来、実に20年ぶりですが、さまざまな条件がうまくかみ合い、当館の西洋近代絵画になかった新印象主義の画家シニャックの作品、しかも第8回印象派展出品作品という美術史的な価値も高い作品が、この度めでたくコレクションに仲間入りしました。

冬も近い朝のセヌ河畔を描いたこの愛らしい風景画は、さまざまな観点から興味がそそられる作品です。この作品を描いたとされる1885年11月、既にスーラと出会って意気投合していたシニャックは、印象主義の乗り越えを意識し始めていたことなのでしょう。技法的には、1880年代初めの大ぶりの筆触が徐々に抑制され、小さな筆触を用いたより緻密な描き方に移行しつつあるのがこの作品です。翌年シニャックは第8回印象派展に参加して、展覧会の後に本作品を母エロイーズにプレゼント。母の没後は再び自分の手元に置き、画家が亡くなると今度はシニャックの血筋で大事に受け継がれるなど、この作品は画家にも家族にも愛されてきたのです。

セヌ川という印象主義にとって重要なモチーフを描き、家族に大事にされてきた《アニエールの河岸》。たくさんの魅力の詰まったこの作品を、4月14日（日）まで公開中です。展示室では解説カードを、ミュージアム・ショップではポストカードとクリアファイルをご用意。日本では初めてご覧いただく機会となる《アニエールの河岸》の公開、ぜひ当館までお運びください。（T.S.）



ポール・シニャック《アニエールの河岸》1885年 油彩、カンヴァス 60.2×92.2cm

新規公募展「カラダで・みる、うごいて・みる！」 受賞作品をロビーにて上映中！

埼玉県立近代美術館では今年度「カラダで・みる、うごいて・みる！」という新規公募展を開催しました。埼玉県内の小・中学生、高校生、特別支援学校生を対象に、当館収蔵作品から受け取ったイメージを身体の動きで表現した動画を募集したところ、41グループの応募がありました。審査の結果、以下のグループが各賞に選ばれました。受賞された皆さん、おめでとうございます！

※学校名、グループ名の順に記載しています。

【総合グランプリ】伊奈町立南中学校 Natto's 【総合準グランプリ】伊奈町立小針小学校 五人島 【小学校グランプリ】伊奈町立小針小学校 チームD 【小学校準グランプリ】上尾市立尾山台小学校 3年1組GETくん4班 【中学校グランプリ】川口市立北中学校 北中美術部Bチーム 【中学校準グランプリ】新座市立第二中学校 ミステリーアート 【中学校準グランプリ】新座市立第二中学校 のんびりアートマッシュルーム 【特別支援学校（級）グランプリ】埼玉県立特別支援学校さいたま桜高等学園 アクアティック 【特別支援学校（級）準グランプリ】東松山市立白山中学校 チーム白3

動画作品には、身体全体をダイナミックに使ったもの、指先で繊細に表現したもの、奥行きや高低差を生かしたものなど、多様な身体表現があり、子供たちの感性の豊かさが表れていました。応募いただいた学校からは、「子供たちにとって言葉だけの鑑賞には難しさがあったけれど、身体表現で深めることができた」という話も聞きました。子供たちが英九《青の中の黄色い丸》を鑑賞した際、最初はぼつりぼつりと話すだけだったそうですが、丸い形に注目した子から「海の中で生き物が呼吸をしている泡なのかも！」と声が挙がったことをきっかけに、子供たちの思いが引き出されていったそうです。そして、「生き物は上を向いて呼吸しているんじゃないかな。」と顔を上に向けたり、「海草もあって、こんな動きじゃないかな。」と手をひらひらさせたりと、動きながらイメージを広げていったそうです。また、身体を動かして伝えることにより、個々に思ったことがわかりやすくなり、子供たち同士の共感にもつながったとのことでした。

公募展「カラダで・みる、うごいて・みる！」は来年度も開催します。作品を自由に鑑賞し、身体表現で楽しく伝え合ってみませんか。ご応募お待ちしております。（R.Y.）



英九《青の中の黄色い丸》1957-58年 MOMAS コレクション第4期に出品中



英九《青の中の黄色い丸》を身体で表現するさいたま桜高等学園 アクアティック 当館1階ロビーにて3月31日（日）まで上映しています。